

追憶の大鳥蘭三郎先生

日本医史学会常任理事 大塚 恭 男

去る七月二十七日に故大鳥蘭三郎先生の納骨の儀が青山墓地で行なわれた。奥様ほか御親族の方々や親しい方々とともに私も最後のお別れをしてきたのだった。思えば先生とは永くありがたいお近付きをさせていただいたものである。

記憶をたどってみると、昭和四二年春に名古屋で日本医史学会総会が行なわれた時、同学会の古い会員であった父敬節とともに参加した折に父から紹介されたのが最初のことのように思う。当時先生は五九歳であられた。その時より数えると二九年に及ぶありがたい御縁につながる事となる。

その後、ほどなくして小川鼎三先生の御提案で毎週一回医史学関係の抄読会が始められた。メンバーは小川・大鳥両先生、酒井シヅ先生、私の四人で輪番に医史学関係の欧文の近著論文を読んで紹介するというものである。先生はこの抄読会専用のノートを作られ、几帳面に記録されておられたのに頭が下ったものであった。

昭和四五年のことである。江戸時代の小児科の大家である米沢藩医堀内素堂の家に伝わる古文書三百点が御子孫にあたる堀内淳一先生より提供されたことがあった。この中には江戸時代の医学史研究のための貴重な一次資料が多数含まれており、小川・大鳥両先生を中心とする六名の研究者による研究班が組織された。幸いなことに私も会員の一人に指名されたことから、大鳥先生と接触する機会も多くなったのであった。

大鳥先生のお書きになったものによると、昭和九年にシーボルト文献研究会の会員として研究に従事されていた折に

日本産の鯨の事が出てきて、鯨の権威である小川鼎三先生をお訪ねになられたという。後年、日本の医史学界を支えた両先生の交流をとりもったのが鯨であったというのも何ともよい話ではなからうか。

先生に最後にお目にかかったのは今年の三月二〇日のことであつた。先生は三月三日が御誕生日で、この日に米寿をおむかえになられたのだった。そんなわけで三月二〇日には先生の秘書役を務めておられた窪田さんと二人でささやかなお祝いのおしるしをさしあげたのだった。

しかし、その後の御病気の進展は意外に早く、五月二二日に到頭「先生御危篤」との窪田さんからのお電話に接したのだった。

学問の上ではもちろん、人生万般に関しても偉大な恩師であられた大鳥先生と永久の別れをしなければならぬことはまことに悲しみに堪えないことである。先生の御冥福を心から祈りつつ筆を擱く。